

水とムラの成り立ち

菅浦の人々が生活用水としていたのは、琵琶湖だけではなく湧水や集落内を流れる水路、谷水があります。
菅浦では「イド」に二つの意味があります。①湧水地点の石組み井戸そのものを指す場合と、②集落内の水路に面して設けられた石段やマス状の洗い場を指す場合です。①は湧水として飲用になり、②は基本的に洗いに用いられます。



昭和30年代の集落内湧水地点・水路・谷水を利用する家の分布図（作成：佐野静代（一部加筆）、ベースマップ：平成21年長浜市基盤地図）

図を見ると集落の東西で水系が異なることがわかります。西部では扇状地の扇端部にある湧水から集められた水路が西の川に流入し、東部では湧水、谷水と阿彌陀寺川の余流が前田川に流れ込み東の川に流入します。
これらの水系は菅浦の集落形成の歴史的経緯を考えるうえで重要な手掛かりとなります。東西の水系は「東村」「西村」の主要部分と対応します。この「東村」「西村」は中世の菅浦惣を構成する地縁共同体ですが、これがそれぞれ異なる水系に依存して成立したものと考えられます。

*本リーフレットは、長浜市文化的景観保存活用委員会佐野静代委員(同志社大学准教授)および南出真助委員(追手門学院大学教授)の調査報告をもとに、当センターが編集しました。

湖岸の民がつくり出した景観

文化的景観

菅浦

すがうら

滋賀県長浜市西浅井町



琵琶湖とともに生きる

菅浦は湖岸に沿うように立地するため、人々は琵琶湖と密接に関わって暮らしてきました。琵琶湖は恵みをもたらす一方で暮らしの安全を脅かす存在でもあります。菅浦の沖合は湖岸直前で急に浅くなるため、高波のエネルギーが一挙に増幅されます。波の力を分散させるために、湖岸に厚い石積みを築きました。

菅浦には湖とともに生きる知恵が多く残されています。その一部をここで紹介します。



■住民の手によって築かれた石積。繰り返し修理しながら大事に残されています。

ハマの景観 ~ハサが並び立つハマ~

昭和50年代前半まで、湖岸の石垣の先には幅数メートルの小規模なハマがありました。ハマは水揚げされる魚、山から伐りだされた柴や薪など様々な物が集まる場所でした。また網を干したり、ヨシを切りそろえるなどといった作業場所としても利用されましたし、洗濯や水汲み、子どもの遊び場もハマでした。かつて菅浦の生業・生活はハマを中心に動いていました。



■稲が干されたハサ。高さ約4mのハサ杭に竹を8~12段渡し、狭い面積でも一度に大量に干せるようになっていました。上の段に手が届かないため、一人が下から投げ、もう一人がはしごで掛けていました。

特徴的なものに、ハマに一定間隔に立てられた稲干し用のハサが挙げられます。菅浦の水田は集落から離れた所にあり、そこから刈り取った稲を日当たりのよい集落前まで舟で運び、二週間ほどハサで干しました。稲干しが終わると竹は取り外されましたが、ハサ杭だけはそのままにして、細竹を渡して年中洗濯物干し場として使われました。

琵琶湖岸の他の地域では一年中ハマにハサ杭が林立する例はあまりありません。おそらく山が湖に迫る菅浦では平地が少なく、人家の密集する集落内部では空き地が確保しにくかったことによるのでしょう。



■稲が干されていないハサ。衣類や網が干されています。琵琶湖ですすいだ衣類をすぐその場で干せて、よく乾くので大変重宝されました。

イナ場の歴史

ハマに面した「浜出」の家々は、家の前のハサをつかい、ハマに面していない「北出」の家々は、集落のはずれにある東西の門付近のイナ場(ハサ場)を利用しました。西のイナ場は西門付近から西に向かってあり、東のイナ場は東門から南側にありました。

近世(大体江戸時代を指します)の菅浦には、ムラによって管理された住民共有の「惣浜^{そうひら}」が存在していました。西の惣浜は西のイナ場があった付近と推定されます。昭和50年代まであったイナ場は遅くとも近世から引き継がれたものだったと考えられます。



■東のイナ場。この付近はハマの幅が狭いため、ヨコガケといって、琵琶湖に並行してハサが立てられていました。

水辺環境の持続的な利用

水辺は住民の共用スペースです。みんなが快適に使い続けるためにさまざまなルールがありました。

舟溜まりの使い方

菅浦には昭和50年代後半まで集落の東西に舟溜まりがあり、それぞれ「西の川(西の舟入、西の入り江)」、「東の川(東の舟入、東の入り江)」と呼ばれていました。昼間はハマに係留し、夜になると各舟溜まりに順番に押し込んでいき、出すときも順番に出していきました。あまり使わない舟は奥に繋いでおきました。

年に一度、お盆の時に、舟溜まりの掃除がありました。土砂をさらい、舟に係留しやすくするためです。



■東の川。各舟溜まりに20~30艘に係留されていました。

湖水面の使い方

琵琶湖の水を飲み水として利用していた昭和40年代前半まで、水を利用するには暗黙のルールがありました。毎朝5時頃にウマとよばれる小さな栈橋まで下りて、一番に一日に必要な分をまとめて水汲みしました。洗った物は飲み水を清潔に保つため、水汲みのあとにおこないました。とくに洗濯物には気をつかい、水を汲む場所から離れて少し沖合などですすいでいました。オシメは家のたらいで粗く洗ったあと、仕上げのみ集落のはずれの琵琶湖ですすいでいました。



■ウマでの洗い物